

メッセージ「他人事か、自分事か」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 9章 35節－10章 16節

一昨日、8月15日は80年前の戦争、日本の敗戦を覚える日でした。多くの命が失われた戦争を「二度と起こさないように」と世界中で多くの人が願ってきているにもかかわらず、今もなお各地で戦争や紛争が続けられていることに、胸が痛むと同時に、人間の業の深さや、道の誤りやすさを思います。その同じ日に、釜ヶ崎では夏祭りで行われていて、年に一度の慰霊祭が行われるので、私も釜ヶ崎に行こうと駅まで行ったところ、電車が止まっていて、駅の構内にも立ち入りが制限されていました。たくさんの救急隊員や警察官が集まって来ていて、何事かと思っていたら、どうやら私が到着するわずか数分前に、駅で「人身事故」が起きたのだそうです。具体的なことは何も分かりませんでした。その後、1時間半くらいして、電車の運転は再開されたようでした。

普段は「人身事故」という言葉を、電車の遅延情報の中で、他人事として右から左へと聞き流しているわけですが、それが、いつも利用している身近な駅で、自分の乗ろうとしていた直前の電車で、「誰かの命が失われた」というのは、途端に自分に身近な事として感じられて、切なくなりました。しかも、その人身事故の実態が、もしも自らの命を殺めたというものだったとしたら、その人はどうしてそうなったのか、他に道はなかったのか、なぜそこまで追い詰められたのかなど、様々なことを思わずにはいられません。お盆の時期で、また慰霊祭や、敗戦の日という日に、そのような形でまた一つの命が失われたということ、その背景にあったであろう、絶望や孤独というものの闇の深さ、根深さを考えさせられました。

今週は、ちょうど「お盆」の時期でしたので、全国各地でお墓参りに行かれた方々も多かったのだと思います。私も教区の仕事で、服部墓地に行きましたが、いつもは人気のない霊園に人と車があふれていて、初めてみる光景に驚きました。よくお寺のお坊さんが言われる「ご先祖様がいなければ、今の自分たちはいませんから、今日まで命を繋いでくださったご先祖様に感謝しましょう」というのは、確かに分かりやすいことです。ですが、「袖振り合うも他生の縁」という諺があるように、今日の自分があるのは何も血縁者だけによらず、隣近所の人たちや、学校や職場の人たちや、様々な人たちとの出会いのおかげであり、それこそある時にある場所で一回すれ違っただけの人との出会いで、何かが変わって今に至っているのかもしれない。病気や事故、災害にしても、人間の予想や計画を越えたところで

働いている何かがあって、今があるのだろうと思います。それをある人は「運が良かったか、悪かったか、だけ」と言うかもしれませんが、私は単なる「運」というよりは、やはり大いなる方の導き、それこそ「ご縁」とも呼ばれる神様の御計画なのではないかと思っています。

そして、そのような「ご縁」とも呼ぶべき、人と人との関係性は、大昔から、世界中のあちこちで、確かに人を生かしてきていたのだろうと思います。今回の聖書のお話も、そのような人と人との関係性のお話として理解することができません。今回のお話は、イエス様が弟子たちを宣教に派遣したというお話でした。「宣教」というと、漢字で「教えを宣べる」と書きますから、如何にも学校で習う勉強のように、難しい教えを勉強させて、教え込むことかと誤解されるかもしれませんが、そうではありません。9 章 35 節で「御国（天の国）の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いを癒された」とあるように、「福音の宣教」と「病の癒し」は一つのセットであり、むしろ同義なのだと思います。10 章 7 節以降でも、「行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。病人を癒やし、死者を生き返らせ、規定の病を患っている人を清め、悪霊を追い出ささい」と言われています。「天の国が近づきました」というお知らせが、「福音（良い知らせ）」なのではなく、目の前で「病が癒され、死んだようになっている人が引き起こされ、規定の病を患っていた人が清められたと宣言され、悪霊に取りつかれていた人が悪霊を追い出された」、まさに天の国が実現したようなことが、「良い知らせ」であったわけです。そして、そのような能力を与えられた 12 人の弟子たちもまた、あなたたちも「ただで受けたのだから、ただで与えなさい」（8）と言われている通りに、かつてはそれらの行為を無償で受けた人たちに他なりません。ですから、自身の体験としても、「癒された」「助けられた」という体験を持ち、「ここに天の国がある」という実感を与えられた人たちが、今度はその「良い知らせ」（福音）を宣べ伝える人になっていったというわけです。

9 節以降は、弟子たちに覚悟を求めるような、「宣教の心得」を伝えているように読んでしまいそうになります。「持ち物を一切持っていくな。ただ神にのみ頼れ」それこそが、弟子の覚悟、宣教の心得だ、ということを伝えているかのようにですが、実際には、弟子たちは元々が貧しく、社会の中からのけ者にされていた者たちでした。イエス様はそのような人たちをあえて選んで、弟子とされていきましたから、彼らには初めから「持っていけるようなものはほとんど何も無かった」ということなのだろうと思います。それが時代を経る中で、最初期の弟子たちを格好よく描きたい、とりわけ「十二使徒」と呼ばれる弟子たちは、特別扱いして描きたい、というような後代の執筆者や編集者たちの思いが反映されて、福音書には実際とは異なった形

で書かれてしまったのではないかと考えられています。

最後の 16 節「あなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り込むようなものだ。蛇のように賢く、鳩のように無垢であれ」というのも、不思議な言葉です。狼の群れの中に羊を送り込んだら、たちまち食べられて終わってしまいだと思われそうですが、イエス様はこれらの言葉で、弟子たちに何を伝えたかったのでしょうか。そのヒントが後半の「蛇のように賢く、鳩のように無垢であれ」にありそうです。「蛇のように賢く」と聞くと、「創世記」の 3 章、天地創造物語の中における「蛇の誘惑」のお話を思い出される方も多いかと思います。言葉巧みにエバをそそのかして、「食べてはならない」と言われていた「善悪を知る木」の実を食べさせた狡猾な蛇です。ですから、この「賢さ」とは「ずる賢さ」のことであって、「宣教の場面においては、時として、そのような『ずる賢さ』も必要になる」とも読めそうです。ですが、蛇には手足がなく、体全体で地面を這いまわり、体全体が感覚器となっていますので、この言葉は「賢さ」と訳するよりも、むしろ「感性の鋭さ」と訳すべきだと考えられます。ですから、全身で周囲の状況を感じ取れる蛇のように感性鋭く、鳩のように純粋で素直、率直でありなさい、と言われているのでしょう。

結局のところ、イエス様が弟子たちに伝えた、福音宣教において一番大切なものは何かと言うと、それは「人の痛みに共感する感性、センス」ということだったのでないかと思います。9 章 36 節の「イエスは（群衆を）見て、深く憐れまれた」と訳されている言葉も、元の意味は「はらわたを突き動かされた」であり、群衆の困り果てた痛みや苦しみに共感してしまって、他人事として放っておけなくなってしまった、ということでした。またイエス様も、12 人の弟子たちも、その日の糧すら満足には持ち合わせていないような、持っている物が何もないような状態であったからこそ、同じように何も持っていない人たち、その日の糧を得るのに腐心している人たちの存在や、その心配事に気が付き、共感し、「放っておけない」と言って、近づき、声をかけ、そして相手の手を取り、持っている物を分かち合い、共に食事をしたのだと思います。そして、それによって病氣や患いは癒され、汚れた霊たちも追い出されていき、死んだようになっていた人たちも再び引き起こされた（死者を生き返らせた 10:7）というわけです。そして、そのようなことこそが「天の国は近づいた」「もう今、ここに来ている」ということに他ならなかったのでしょう。

この後、歌います賛美歌の中にも出てきますが、私たちが告げ知らせ、宣べ伝える「み言葉」とは、イエス様の語ったセリフのことでも、聖書に書かれている文章のことでもありません。むしろ、イエス様の「言ったこととやったこと」、言葉と振る舞いで示された、イエス様の生き様という出来事全部が「み言葉」です。そしてイエス様の「弟子たち」とは、そのようなイエス様の価値観と生き様を、自分自身の価

値観と生き様とする人たちのことでした。言い換えれば、他人の痛みを自分の痛みとして感じられる人たちであり、イエス様がなされたように、「友なき人の友になる人たち」ということだと思います。

人は一人では生きられませんが、隣に友達がいれば、たとえ様々なものがなくても、足りないものはお互いに分かち合って、工面し合って、生きていくことができます。様々な物が乏しく、皆が貧しかった時代から、多くの人たちは、そのようにして命を繋いできました。それがやがて、生活が豊かになり、地縁や血縁などが薄くなり、失われていくことを通して、お金のやりとりが増え、社会経済は発展してきました。しかし、その分、人と人とのつながりや関係性は分断され、孤立し、「羊飼いのいない羊のように」(9:36)さまよい、互いの命を傷つけ合っているのが、現状ではないでしょうか。

もちろん、かつての閉鎖されたムラ社会、濃密な地縁血縁の中では、息苦しく、閉塞感があり、暴力やハラスメントにもあふれていたと思いますし、そこからの脱出と解放を目指して、都市社会が形成されてきたのだと思いますが、そのようにして作られた近代社会の都市、いわゆる都会は、決して「天の国」ではありませんでした。

「天の国」はどこにあるか、一人一人の人がつながり合い、互いの命が生かされ、大切にされる天の国は、どこかにあるものではなく、「今ここにあるもの」(ルカ17:21)。あなたが、わたしたちが実現するもの、神様と共にあって実現し得るものということを、聖書は私たちに告げているのだと思います。

非常に多くの情報が、ものすごいスピードで飛び交う現代社会は、まさに他人事だらけの時代だとも言えます。そのような時代の中で、私たちは誰と出会い、関係を築き、友だちになるか。その相手のことを、自分事として受け止めるか、そのことが問われているのだと思います。もちろん、私たち一人ひとりには、様々な限界もあれば制約もありますから、目に映る全ての人と等しく接することはできないと思います。それでも人と出会い、友達になるというのは、意識的にすることでもありません。その大部分は、実は無意識的なもので、「気が付いたら、友達になっていた」というものではないかと思います。だからこそ、知識や勉強としての「賢さ」ではなく、蛇のような「感性の鋭さ」であって、隣人の存在に気付く「感性」「センス」が大切なのだと思います。

自分自身の中に終始してしまうのではなく、お互いに「自分事」の範囲を少しずつ広げていき、共に活かし合える神の国を、今日ここにも実現していくように、私たちは一人ひとり用いられていきます。